

# TJFニュース

「TJFニュース」では、TJFの活動報告や、TJFの事業に関連するさまざまな動きをニュースとしてまとめ、お伝えしていきます。

## ■高校生のフォトメッセージコンテスト

### 第10回高校生のフォトメッセージコンテスト入賞作品決定!

TJFが毎年開催している「高校生のフォトメッセージコンテスト」は、今回10回目を迎えました。このコンテストは、日本の高校生の生き方や暮らしぶりを、高校生自身が撮った5枚の写真と文章で、日本国内や海外の同世代の若者に伝えてもらおうとの趣旨で行ってきました。

今回は全国55の高校から、166作品(写真830枚)が寄せられました。その内訳は、写真部や美術部などの部活動の一環として制作した作品が110作品(66%)、美術、日本語などの授業の一環として制作した作品が45作品(27%)、個人制作が11作品(7%)でした。

1月24日に開いた審査会において、最優秀賞(広島工業大学附属広島高等学校の平松絹子さんの「世界を引き寄せる君」)をはじめ、入賞作品30点を決定しました。審査員長の田沼武能氏は、「平松さんの作品は、将来海外で医療活動に従事したいという主人公の真田君が希望に満ちた生活を送っている様子を、真田君の表情を通して1枚目の写真で物語っています。また、マレーシアでの経験を後輩に報告するために準備している4枚目の写真は、真田君の真剣さを写しとり、作品を引き締めています。ことに5枚の写真のまとめ方とカメラワークの良さが作品の構成のうまさにつながった作品です」と講評されました。

2月24日には、上位入賞者6名を東京に招待し、授賞式と懇親会を行いました。賞状や盾の授与の後、撮影者に自分の作品について語ってもらう時間を設け、作品のねらいや制作中のエピソードなどを披露してもらいました。また授賞式会場では入賞作品30点とコンテストの10年間でまとめたパネルの展示も行いました。



入賞者とコンテスト関係者の記念撮影(写真:北郷仁)

入賞作品はTJFのホームページ(<http://www.tjf.or.jp/photocon/>)の「過去の入賞作品」のコーナーでも閲覧できます。また、入賞作品を中心に応募作品をまとめた写真集『The Way We Are 2006 伝えたい私たちの素顔』を7月初めに発行し、国内関係者のほかアメリカ、オーストラリア、中国など海外の中高校で日本語や日本について学ぶ同世代に見てもらうため、関係機関に寄贈する予定です。さらに、英語圏の高校生向けには英文ホームページに、これまでの入賞作品から厳選した写真とエッセイを掲載し、個性豊かな日本の高校生の姿を親しみやすく紹介しています(<http://www.tjf.or.jp/thewayweare/>)。

このコンテストは10回目の今回をもって終了することになりました。第1回から審査員長を務めてこられた田沼武能氏は、「10年間に見えてきたものは高校生の生き生きとした姿であり、それらにはそれぞれの時代が記録されています。何よりも高校生が高校生を撮ったことにより、よりリアルに高校生の考え、生活感が表現されているので、今後の貴重な資料となると信じます」と述べています。TJFでは高校生の相互理解を育んできたこのコンテストの趣旨をさらに発展させ、本年8月には特別交流事業として、世界各国から招聘した高校生と日本の高校生が、日本各地に分かれて人々の姿や暮らしを撮影し交流するプロジェクト「Focus on Japan 2007」を実施します。ホームページには参加高校生の作品を掲載するほか、世界の高校生と意見交換をする場も設け、日本の高校生による世界に向けての発信や、世界の若者との相互理解を支援したいと考えています。詳細はホームページ([http://www.tjf.or.jp/focusonjapan/index\\_j.html](http://www.tjf.or.jp/focusonjapan/index_j.html))をご覧ください。

(辻本京子・藤掛敏也)



来場者を前に作品について語る平松さんと主人公の真田さん(写真:北郷仁)

## 最優秀賞■

## 「世界を引き寄せる君」

……平松絹子（広島工業大学附属広島高等学校）



①



③



④



⑤

研修旅行で行ったマレーシア・サラワク州で、私たちはいろいろな体験をした。生きた鶏を自分たちの手で調理し、茶色く濁った川で水浴びをした。マングロープの苗床を作り、ロングボートに乗って植林しに行った。何もかもが初めての体験ばかり。私はびびりしたり、感動したりしながらも、カメラ越しに真田くんを追った。ありのままの自然や、温かい現地の人々との触れ合いは、真田くんの表情をくるくると変える。

日本に帰ってマレーシアでの体験をもとに授業することになっていた。マレーシアで吸収し学んだことを、今度は後輩に向けて発信する。伝えたいことは、環境のこと、命のこと、人とのコミュニケーションのこと。真田くんの授業はまっすぐに届いてくる授業だった。普段はおしゃべりな生徒たちも、いつのまにか話に引き込まれている。生徒の素直な反応も、真田くんは素直に受け止めて一緒に考えていた。

私たちはいつも世界に引き寄せられただけで終わってしまう。それだけで満足してしまうのは、誰にでもできること。そこから一步踏み出して自分の力で世界を引き寄せるにはどうしたらいいか、真田くんは気づかせてくれた。これからは、ただ引き寄せられっぱなしじゃなくて、自分の手で掴んでいこう。(抜粋)

①マングロープの植林の帰り。服は水浸し、手足は泥だらけになったけど、「楽しかったね」と言ってみんなで笑っていた。ボートの上は太陽も風もとても気持ちがいい。②川での水浴びは一日の楽しみ。深く底に足が届かない！水が茶色く濁っているのは、森林伐採の影響で川に土壌が流出しているから。③ロングハウスの簡易水道設置作業を手伝っているところ。水を通るパイプを土に埋めるんだけど、これがなかなか大変だった。④授業準備の最中。授業案には文字やメモがぎっしりだ。一生懸命に授業を組み立てていく。⑤真田くんが小学校のときから通っている英語教室は、英語で歌を歌ったり劇をしたりする楽しい教室。一番年長の真田くんは子どもたちをまとめるお兄さんのような存在でも、遊び相手でもある。

## 主人公■真田悠希（17歳）

趣味：ギター／好きなことは：「好き」／大切なもの：自分のことを受け入れてくれる仲間／熱中していること：ギターを弾くこと／将来の夢：発展途上国への医師派遣団体に加入して、国際的な医師として活躍したい

## メッセージ：

僕はこの夏に学校の研修旅行でマレーシアに行ってきたんだよ。ロングハウスって高床式の長屋で、先住民族イバンが暮らしているところに1週間くらいホームステイしてきたんだよ。ロングハウス内の各世帯同士のつながりはとても強くて、みんな家族みたいだったよ。すごく解放感があって、本当にリラックスできる最高の場所だったよ。普段学校ではあんまりしゃべれない他の日本人メン

バーも、ロングハウスでは一皮むけてたよ。

マレーシアは環境問題がすごく深刻なんだ。僕ら日本人が木材をたくさん輸入するから、森林伐採をたくさんしているんだよ。森林の木がなくなるから、土壌が川に流れ出して川の色が茶色くなってしまうんだ。マレーシアに行く前は他人事にしか思えなかったけど、そこに住む人とながりができたから、他人事には思えなくなったよ。だからマレーシアのために何か自分にできることがしたいと思うようになったよ。

やっぱり、援助をするためには、援助する相手を素敵な国だと思って、援助したいって気持ちになることがまず必要だと思うんだ。僕は今年マレーシアという素敵な国を見つけた。この国を出発点として、他にもたくさんの素敵な国を見つけて、その人々とつながりを持って、その国の問題点を解決していきたいな。医者を目指す僕は、医療という形でかな。(抜粋)

## ◆最優秀賞（1作品）：

「世界を引き寄せる君」平松絹子（広島工業大学附属広島高等学校）

## ◆優秀賞（2作品）：

「やさしき人」中元早太（大阪府立大手前高等学校定時制課程）／「ガチャの青春」山根衣理（千葉県立津沼高等学校）

## ◆審査員特別賞（3作品）：

「なんくるないさあ～精神の持ち主!! しょうこ先輩!!」北上奈生子（沖縄県立真和志高等学校）／「ほどほどに田舎もの」本田 涼（宮城県塩釜高等学校）／「いつも いつも お兄ちゃん」長谷川 明（大阪市立工芸高等学校）

## ◆奨励賞（12作品）：

「こずしかない!!」吉田花菜子（順天高等学校〔東京都〕）／「土曜日のぞじょ」澁谷陽菜（中越高等学校〔新潟県〕）／「up down, up!!」中島ゆう子（和光高等学校〔東京都〕）／「我らのあつあつ」錦木朋実（千葉県立柏高等学校）／「女優・変顔役者・サキ」千葉桃子（秋田県立大館高等学校）／「のんちゃん」寺岡沙織（広島県立庄原格致高等学校）／「ちっこい体ででっかい夢を」徳山実華（大阪インターナショナルスクール）／「囚繫」入口峰広（奈良県立高取国際高等学校）／「未来のスーパースター」鄭 陽治（大阪府立大手前高等学校定時制課程）／「多彩に活動」川井和真（市川高等学校〔兵庫県〕）／「まいだあありん」森 洋子（香川県立坂出高等学校）／「私の友達」大田沙織（筑紫台高等学校〔福岡県〕）

## ◆努力賞（12作品）：

「いやし系少女 さおりん」岩宮千尋（桜美林高等学校〔東京都〕）／「笑顔につよさ」大竹良枝（埼玉栄高等学校）／「加奈と由利亜～誰にも見えない絆～」北浦加奈（大阪府立大手前高等学校定時制課程）／「3年間ありがとう! これからもよろしく!」坂本悠紀（大阪市立工芸高等学校）／「自分に正直に、まっすぐまっすぐ!!」佐竹 薫（大阪市立工芸高等学校）／「村瀬と溶け込んだ日々」柴田新二（岐阜県立岐阜工業高等学校）／「仲間×仲間」園田泰子（東京農業大学第一高等学校）／「いっちゃんのキラキラな日々」高橋有早（秋田県立横手高等学校）／「我がキムりん!」橋本光平（正則高等学校〔東京都〕）／「ねんごろねごろ」林 咲樹（香川県立丸亀高等学校）／「無邪気な彼」村瀬真奈美（岐阜県立岐阜工業高等学校）／「Peach ☆ Girl」山田 咲（秋田県立大館高等学校）

## ◆学校賞（4校）：

正則高等学校（東京都）／大阪インターナショナルスクール／筑紫台高等学校（福岡県）／東京都立工芸高等学校



■韓国朝鮮語・中国語教育関連プログラム

フォーラム2006:私たちはなぜ韓国語・中国語を学ぶのか

昨年12月9日、東京・有楽町の朝日ホールにおいて、「私たちはなぜ韓国語・中国語を学ぶのか」というテーマで公開フォーラムを開催しました。2002年から毎年、駐日韓国文化院とTJFほかの共催で、韓国語教育の意義、現状と課題などを問うフォーラムを開催してきましたが、フォーラム2006では、駐日中国大使館の教育部門が加わって、三者共同で開催しました。韓国語教育への関心を喚起することを目的として始めたフォーラムですが、同じく隣国のことばである中国語も視野に入れて開催できたことは意義深い試みでした。韓国語や中国語を学ぶ高校生と大学生9名をパネリストに迎え、英語中心の日本の外国語教育をうけてきたかれらが、韓国語や中国語をなぜ履修し、それをどのように捉えているかを語ってもらいました。二人の高校生が学習している教室風景や、教師や保護者の意見などもビデオにまとめ上映しました。発言者の教師や家族・友人などを含む約100名が参加しました。

学んだきっかけ (以下、発言者の声より抜粋)

- 高校の在校生に中国人や韓国人の生徒が多い。韓国人が流暢に日本語を話すので、私も韓国語ができたらいと思った。[高3]  
高3のとき、韓国映画を見て、韓国語が母の方言と響きが似ているのに懐かしさを感じた。[大2]
- 高2のとき、中国語・フランス語・ドイツ語・韓国語から一つ選択できる。兄の勧めで中国語を勉強したかったが、選択できず、韓国語を履修した。ハングルのもつ幾何学的な美しさにも引かれた。[高2]
- 小学生のころから、母についてよく中国に旅行した。万里の長城など壮大な景色に魅せられた。中国人のおおらかさが好き。高1から母と同じ専門学校で2年間学んだ。[高3]
- 韓国語も学びたかったが、『三国志演義』に興味があり、中国語を選択できる高校に進んだ。[高2]
- テレビで桂林の映像を見て、中国語の音に魅力を感じた。小4から中3まで近所の学院で学んだ。高校でも3年間学んだ。大学では第2外国語として中国語と韓国語を履修。[大3]

気づいたこと

- 文化とことばを一緒に学べるのが楽しい。日本語だけでなく、外国語で情報を得ることができる。あまいさを残さない韓国的なコミュニケーションが興味深い。歴史問題について考えるようになった。[大2]
- ことばの共通性や食文化など、韓国の文化を身近に感じた。[大4]
- 中国語で通じるようになったのが嬉しい。上海語・広東語・福建語なども学びたい。[高3]
- 中国語を学んだあと中国に行き、距離感の違いにカルチャーショックを受けた。中国は雄大だ。万里の長城で土産店への行き方を、中国語で理解できた。[高2]

(小栗章)

■TJFホームページ

「日本の小学生生活」、さらに使いやすくリニューアル!

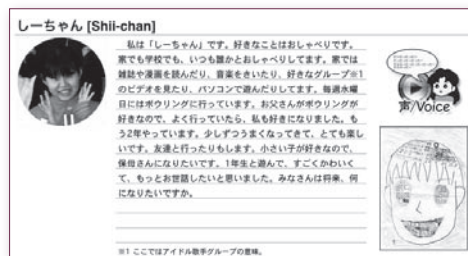
「日本の小学生生活」は、2005年春に公開したホームページです。東京都のある小学校の6年1組の一日と、石川県に住む小学3年生の



のけんたろうくんの一日を、写真と文章(日本語、英語、中国語の3言語)で紹介しています。日本人と会う機会があまりない海外の小学生が、写真や、手紙、メッセージという生きた素材を通して日本の子どもたちに出会い、身近に感じながら、楽しく日本語を勉強してもらうことを目的としています([http://www.tjf.or.jp/shogakusei/index\\_j.htm](http://www.tjf.or.jp/shogakusei/index_j.htm))。

日本の小学生からのメッセージ

「6年1組の自己紹介」「けんたろうくんの自己紹介」コーナーでは、けんたろうくんや、6年1組の児童たちの声のメッセージを聞くことができます。



6年1組のしーちゃんの自己紹介

どんな一日?

6年1組の時間割表をクリックすると、一日の学校生活や授業の様子を写真と文章で知ることができます。写真のキャプションは6年1組の子どもたちが実際に書いてくれたものです。



給食の時間と(左)総合学習の授業の様子(上)

2007年1月、「けんたろうくんの一日」のデザインを一新し、これまでは英語だけでしたが、日本語、中国語を加えて3言語にするとともに、さまざまな新しい工夫を追加しました。

#### 工夫1 解説をつけました

写真や文章の内容について、もう少し深く知りたい人のために、日本の小学校の生活について解説をつけました。たとえば、学校生活の流れや、科目の説明などを読むことができます。

#### 工夫2 どんな授業ができるかわかります

日本語教師のために、このホームページを使って、どんな日本語の授業ができるか、アメリカ、カナダ、イギリス、ニュージーランド、オーストラリアの小学校の先生に書いていただいたアイデアを掲載しました。TJFが中国の小学校日本語教師研修会で紹介した授業のアイデアも掲載しています。それぞれの国の事情を踏まえたものもあれば、どこでも使える汎用性の高いものもあります。

(原島陽子)

#### ■高校中国語教育関連事業

#### 日本と韓国的高校中国語教育がつながる

2年前の冬、日本の高校中国語教員2名とともに、韓国京畿道中等中国語教育研究会の年次大会に参加する機会があり、韓国的高校中国語教員のネットワークである、韓国中等中国語教育研究会(以下、韓中研)の洪巨杓会長に会うことができました。2004年からTJFが文科省、中国教育部と共催で開催している日本の高校中国語教員を対象とした研修が、中国長春市にある吉林大学で行われていますが、韓中研が企画している、韓国高校中国語教員のための修士課程の集中講義が、同じ長春市にある東北師範大学で夏休みと冬休みに行われていることが、その際分かりました。洪会長と翌夏に長春で再会し、今後の双方のプログラムの連携について話し合った結果、まずは教材やガイドラインなどの交換から日韓の高校中国語教員間の交流を進めることを確認しました。

2006年度は、教師個人ではなく、日韓の高校中国語教員のネットワークという組織同士のネットワーク化を、かめのり財団の助成を受けて進めてきました。昨年6月に関西大学で行われた、高等学校中国語教育研究会(以下、高中研)主催の「2006年高等学校中国語教育全国大会」にあわせて韓中研の洪会長と朴容鎬副会長を日本に招き、高中研の教師との話し合いの場を設け、また分科会に参加してもらって、日本の高校中国語教育の現状にふれてもらいました。今年の1月には、高

中研の藤井達也代表理事とともに韓国を訪問し、洪会長とこれからの交流の進め方について話し合いました。

今後も具体的なプログラムを企画することを通し



懇親会で日本の中国語教師と話す  
洪会長(左から二人目)と朴副会長(左)

て、日韓の高校中国語教員間のネットワークが強固なものになっていくことを期待しています。

(水口景子)

#### ■理事会・評議員会

#### 2006年度第2回通常理事会・評議員会の報告

去る3月23日、理事会・評議員会が開催され、①2006年度事業概況中間報告および収支予算の一部変更の件、②2007年度事業計画および収支予算書の件、以上二つの議案はいずれも承認されました。任期満了にともなう役員の選出については、鈴木正一郎理事、黒田瑞夫顧問、中西鉦治評議員が退任し、篠田和久氏(王子製紙代表取締役社長)が理事に、佐藤國雄氏(ユネスコ・アジア文化センター理事長)が評議員に、新たに選出されました。

2006年度の事業はおおむね順調に進捗しました。設立20周年にあたる2007年度は、通常の実業に加え、記念事業として、国内外の高校生によるフォトメッセージ制作交流事業「Focus on Japan 2007」や、高校生のネット上の交流の場として、4言語(日・英・中・韓)によるホームページ「つながる」の開設、「20年史」の刊行などを予定しています。今年度も皆様のご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。(田所宏之)

#### 実施事業一覧(2007年1月・2月・3月)

- 第10回高校生のフォトメッセージコンテスト審査会開催(1月/東京)
- 文部科学省委嘱事業「高校中国語・韓国朝鮮語の学習のめやす」づくり(1~3月)
- 『国際文化フォーラム通信』第73号発行(1月)
- 『小溪』No.31発行(1月)
- 第10回高校生のフォトメッセージコンテスト授賞式開催(2月/東京)
- 初級学習者のための「話してみよう韓国語」後援(2月/東京、大阪、鹿児島)
- 特別交流事業「Focus on Japan 2007」審査会開催(3月/東京)
- 高校生意見発表会運営委員会主催第7回高校生意見発表会後援(3月/東京)
- 第7回北陸地区高校生中国語発表会後援(3月/金沢)
- Takarabako No. 11発行(3月)
- 『ひだまり』第30号発行(3月)

2007年度実施事業一覧

I. 国内外の小中高校における外国語教育を促進する事業

- A. 海外の小中高校日本語教育関連プログラム
  - ・中国大連市小中高校日本語教育支援プロジェクト
  - ・中国遼寧省教育代表団招聘
  - ・中国東北部地域日本語教育研究活動協力・助成
  - ・「TJFフォトデータバンク（日本編）」ホームページ制作運営
  - ・海外小中高校日本語教師向け情報誌発行とホームページ制作運営
  - ・日本語教育TJFネット
- B. 日本の高校中国語教育関連プログラム
  - ・高校中国語教師研修会共催
  - ・高校中国語教育研究活動協力・助成
  - ・中国語を学ぶ高校生の中国短期研修
  - ・「TJFフォトデータバンク（中国編）」ホームページ制作運営
  - ・高校中国語教師向け情報誌発行とホームページ制作運営
  - ・中国語教育TJFネット
- C. 日本の高校韓国朝鮮語教育関連プログラム
  - ・韓国語教師研修会共催
  - ・高校韓国朝鮮語教育研究活動協力・助成
  - ・韓国朝鮮語教育TJFネット
- D. 日本語・中国語・韓国朝鮮語教育連携プログラム
  - ・「高校中国語・韓国朝鮮語の学習のめやす」づくり
  - ・フォーラム2007共催

II. 海外の日本語学習者と日本の同世代間をつなぐ交流事業

- ・第10回高校生のフォトメッセージコンテスト作品集発行
- ・「The Way We Are」ホームページ制作運営
- ・中高校生の交流ウェブサイト「つながる」制作運営\*
- ・高校生交流プロジェクト「Focus on Japan 2007」開催\*
- ・日中学校交流活動協力

- ・日米学校交流活動協力
- ・小中高校国際理解教育研究活動協力・助成
- ・国際理解教育TJFネット

III. 広報

- ・機関誌発行とホームページ制作運営
- ・『TJF事業報告2006-2007』（和英）発行
- ・『TJF20年史』（仮題）編集出版\*
- ・一般図書教材管理寄贈
- ・TJFホームページ制作運営・サーバー／情報機器管理
- ・広報TJFネット
- ・設立20周年記念式典開催\*

(\*設立20周年記念事業)

中高校生のコミュニケーションの場「つながる」ウェブサイトを開設します

2007年5月、世界中の中高校生が交流できる場として、SNS（ソーシャル・ネットワークワーキング・サービス）を利用したコミュニケーションのためのウェブサイト「つながる」を開設します。主な参加者は、国内外の国際理解に関心のある中高生、海外の日本語学習者、日本の外国語学習者（英語、中国語、韓国朝鮮語）を想定しています。

参加者は自分のページで日々考えていることや発見したことなどをエッセイや写真などで発信し、それに対してほかの参加者からコメントを受け取ることができます（「マイエッセイ」）。そのほか、参加者同士が関心のあるテーマについて議論を深める場（「コミュニティ」）や、参加者自身が撮影した写真を発表できる場もあります。

一人ひとりさまざまな社会・文化・言語の背景をもつ参加者が、お互いの考えていることや生活を知ることによって視野を広げ、自分自身への理解を深め、他者への共感を育んでいけるような場づくりをめざします。また、外国語学習者は、「つながる」上で、学習したことばを使ってリアルなコミュニケーションを体験することができ、学習意欲が高まることが期待されます。

<http://www.tsunagaaru.com>

編集後記

[http://www.tjf.or.jp/newsletter/kouki/kouki\\_j.htm](http://www.tjf.or.jp/newsletter/kouki/kouki_j.htm)

昨年度をもって、10年続いた「高校生のフォトメッセージコンテスト」の幕を下ろした。その間、延べ2,648組の高校生（撮影者と主人公）がコンテストに参加し、200点以上の入賞作品をTJFの日本語版のウェブサイトに掲載した。英語版のサイト「The Way We Are」には、さらに厳選した80組の高校生の作品を、日本語学習者向けに日本語の音声や日本文化の解説をつけて掲載している。当分の間、これらのサイトは保存版として公開していく。第10回のコンテスト応募作品は10冊目の写真集となって7月に発行する予定である。夏には、10年の記念特別事業として、国内外の高校生の撮影交流事業「Focus on Japan 2007」も日本の4地域で開催する予定である。アメリカ、イギリス、オーストラリア、韓国、中国、日本の高校生、計16名が各地の生活や風土にフォーカスする。

10年を振り返ると、事業は試行錯誤の連続だったが、さまざまな成果を上げることができたと思う。①まず何よりも1997年から2006年にわたって、日本の高校生自らがその素顔を国内外の若者に向けて伝えることができたこと。入賞作品のみならず多くの参加者の写真やメッセージを編集して写真集として発行し、多くの海外の同世代にメディアではなかなか伝わらない日本の若者の実態や文化を発信できた。②写真を撮ることが他者理解につながる貴重な取り組みであることを認識することができたこと。主人公となる

被写体を撮るというプロセスをとおして、撮影者は自己を表現し、主人公との関わりを深め、自分の生き方を見つめることができた。③財団という第三者的機関による発表の場で入賞したことが、自信の回復につながった高校生たちがいたこと。④文化交流の優れた表現媒体として写真を見直すことができたこと。写真のもつリアリティは、メッセージに説得力を与えてくれた。フォトメッセージは、一人ひとりのメッセージでもあり、固定観念を破る日本文化のメッセージにもなりえた。それは日本の若者を題材としたTJFのその後の写真教材開発の原点ともなった。また作品の写真は、毎年、海外の日本語教育や日本理解教育の現場に素材を提供する「TJF Photo Data Bank」の新たな源泉となった。そしてTJFとしては、⑤全国の高校写真部とのネットワークを築くことができたこと。TJFの貴重な財産である。⑥教師を対象とする事業が多かったなかで、直接高校生たちに出会うことができたこと、などを挙げることができる。

今号に登場している第1回と2回の最優秀受賞者の、立派な社会人として成長した姿に深い感慨を覚えた。「高校時代、コンテスト用に撮った写真が今の自分の土台になっている」ということばに、高校生の成長の過程に関わる仕事をしていることの責任をひしひしと感じさせられた。

中野佳代子

財団法人 国際文化フォーラム  
THE JAPAN FORUM  
(TJF)



国際文化フォーラム通信 74号  
2007年4月発行

発行人・編集人 中野佳代子  
デザイン・DTPオペレーション 飯野典子  
フォーマット設定 鈴木一誌  
出力・印刷・製本 近代美術（株）  
校閲（有）天山舎

財団法人 国際文化フォーラム

〒163-0726 東京都新宿区西新宿2-7-1  
新宿第一生命ビル26階  
TEL 03-5322-5211 FAX 03-5322-5215  
E-mail: forum@tjf.or.jp  
<http://www.tjf.or.jp/>